

ゼネラル・ストライキ後のシアトル労働運動

黒川 勝利

はじめに

先に発表した論文の中で私は、アメリカ北西部、ワシントン州シアトルにおける労働団体と日系人との関係について検討し、特に1919年のゼネラル・ストライキを契機として、シアトルの労働団体と日系人社会との間に友好的な関係が成立したという事実を明らかにした⁽¹⁾。

このような労働団体と日系人社会との関係は、当時においてはかなり例外的なケースであって、合衆国の労働運動の指導者の多くは、第一次世界大戦後においてなお、日系人を含むアジア系移民にたいして敵対的、かつ差別的な言動を繰り返していた。

それにもかかわらずシアトルにおいて、日系人が労働団体やその指導者に、不十分ながらも友人、同志として受け入れられるようになるには、日系人社会の先覚者たちによる、労働団体との関係改善のための粘り強い努力と、アメリカ史上最初の本格的なゼネラル・ストライキがシアトルで発生し、その際の日系人労働者の真摯な対応が労働団体によって高く評価されるという経緯が必要であった。

(1) 拙稿「シアトル・ゼネラル・ストライキと日系人労働者(Ⅰ), (Ⅱ), (Ⅲ)」(『岡山大学経済学会雑誌』第21巻第4号, 1990年, 第22巻第1号, 1990年, 第22巻第2号, 1990年), 「第一次大戦前のシアトル労働運動と日系人問題」(『岡山大学経済学会雑誌』第23巻4号, 1992年), 参照。

しかしながら同時に、シアトルあるいはその周辺地区の労働団体の指導者の多くが、当時シアトルで日系人新聞『大北日報』を発行していた竹内幸次郎が述べたように、もともとアジア系移民に対する偏見から自由な世界観の持主であり、それゆえにこそ、他ならぬここシアトルにおいて、このような日系人の側の努力が評価され、受け入れられたのである、という事実もまたここで強調しておく必要がある⁽²⁾。

実際、シアトルの労働運動は、当時の合衆国の地方都市の労働運動としては、きわめてユニークな存在であった。

シアトルの活動家の多くは、当時の合衆国の労働運動を牛耳っていたアメリカ労働総同盟 American Federation of Labor (以下、AFL と略す) 本部の、ほとんどあらゆる方針に反対していた。彼等は、AFL 本部のクラブ・ユニオニズムに対して産業別組合主義を、無党派主義に対して独立の労働者政党の建設を主張していた。AFL 創立以来の指導者、サミュエル・ゴンパース Samuel Gompers 会長の再選に、1919年と1920年の AFL 大会において唯一反対票を投じたのは、シアトル中央労働評議会書記のジェームズ・ダンカン James A. Duncan であった。ゴンパースのいわゆる「純粋にして単純な労働組合主義 pure and simple unionism」は、シアトルの活動家から見ると、合衆国東部の活動家の救いがたい保守主義と、労働運動の資本家への屈伏の象徴に他ならなかったのである⁽³⁾。

他方、AFL 本部にしてみれば、シアトルの労働運動はアメリカ労働運動の内部における危険な傾向の象徴であり、厄介な異端に他ならなかった。

このようなシアトルの労働運動の中心となっていたのは、シアトル中央労働評議会 Central Labor Council of Seattle and Vicinity (以下、SCLC と

(2) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』大北日報社、1929年、204、391頁。

(3) 以下、シアトル労働運動の一般的状況についてはさしあたり、Robert Friedheim, *The Seattle General Strike*, Seattle: University of Washington Press, 1964, pp. 25-52を参照。

略す)であり、そのもっとも有力な指導者が、謹厳なプロテスタント、熱心な禁酒論者であるとともに、社会主義や産業別組合主義への共感を隠さない、ジェームズ・ダンカンであった。

本来ならば、SCLCのような地域団体は、AFLの機構の中でそれほど重要な地位を占めているわけではない。AFLの原則によれば、シアトルのローカル・ユニオンとその組合員を最終的にコントロールする権限を有しているのは、その所属する職種別の全国組合、国際組合の本部であって、ローカル・ユニオンがこれらの地域団体に加盟することも、別に義務づけられているわけではない。

しかしながらシアトルでは、非常に多くのAFL系ローカル・ユニオンがSCLCに加盟しており、またその決定が事実上ローカル・ユニオンの行動を左右していた。組合員や活動家の忠誠心も、その所属する全国組合、あるいは国際組合の本部よりも、SCLCやシアトルのローカル・ユニオン自体に向けられていたのである。

シアトル労働運動のもう一つの特徴は、「合衆国における最初にして唯一の労働者所有一般向け日刊新聞」⁽⁴⁾といわれるシアトル・ユニオン・レコード紙 *The Seattle Union Record* の存在であった。ユニオン・レコード紙は、編集長、ハリー・オルト Harry Ault の指導の下で急成長し、労働団体の機関紙でありながら、最盛期にはその当時のシアトルの一般新聞——シアトル・タイムズ、シアトル・ポスト・インテリジェンサー、シアトル・スター——とほとんど変わらない部数を印刷していた。これが、一般市民に労働者の大義を宣伝し、ストライキなどの際にシアトルの労働者の間の連帯を強化するための、きわめて強力な武器となっていた。

さらにシアトルでは、以上のようなAFL系の組織や活動家に加えて、

(4) Mary Joan O'Connell, "The Seattle Union Record, 1918-1928: A Pioneer Labor Daily", MA Thesis, University of Washington, 1964, p. v.

1905年に AFL の保守性、閉鎖性に批判的な活動家によって結成された世界産業労働者連盟 Industrial Workers of the World (以下、IWW と略す) が、当時なおかなりの影響力を持っていた。AFL とは逆に、結成以来アジア系や黒人を含む一切の人種を無差別に組織化の対象としてきた IWW は、第一次大戦期に、反戦活動を理由とした合衆国政府の弾圧によって大きな打撃を受けたが、シアトルを中心とする地域においては、戦後もなおかなりの活動家、支持者を擁して運動を続けていたのである⁽⁵⁾。

もちろん、シアトルでも IWW はまったくの少数派であった。しかし彼らの一部は同時に密かに、あるいは公然と AFL 系組合に加入し、あるいは傍聴席に大挙押しかけて騒ぎ立てることによって、SCLC の決定に圧力を加えていた。もっとも IWW のメンバー、すなわちいわゆるウォブリーズ Wobblies が AFL 系組合の重要なポストに就くことはシアトルでもまれであった。

もちろん、シアトルにもゴンパース的な路線を支持する保守派 Conservatives が存在した。彼らの中でもっとも有力な指導者はワシントン州労働総同盟 Washington State Federation of Labor (以下、WSFL と略す) 会長のウィリアム・ショート William Short であった。しかし他方では、心情的にはむしろウォブリーズに近い (そしてその一部は先に述べたように実際にウォブリーズであった) いわゆる急進派 Radicals が少なくなかつ

(5) IWW が人種差別に反対していたことは周知の事実であるが、これが単なるスローガンでなく、シアトルの日系人によっても感じとられていたという事実を示す例を、一つだけ挙げておこう。1925年にサンフランシスコで開かれた第12回太平洋沿岸日本人会協議会において労働組合との関係が話題になった時、西北部連絡日本人会を代表して出席していた松見大八は、南加中央日本人会代表の疑問に答える形で、「沙市 (シアトル) はアイ・ダブルユー・ダブルユーの勢力の盛なる処ゆえ自然組合に加入を容易ならしめた傾向があります」(『太平洋沿岸日本人協議会議事録』大正14年9月17日, Japanese American Research Project Collection, Box 728 (Oversize No.81), University of California at Los Angeles) と述べている。

た。その結果として、ダンカンやハリー・オルトのような、AFLに忠誠を誓いつつもゴンパース路線には反対する、AFLの内部からの変革を主張するいわゆる革新派 Progressives が、シアトル労働運動の主導権を握っていたのである。

しかしながら、ゼネラル・ストライキは、このような状況の転換点となった。内部対立の激化や反組合的実業家団体の攻撃によって、シアトル労働運動は大きく動揺する。AFL本部もシアトルの活動家への批判を強める。結局のところ、この北西部の一都市に生まれた異端、少数派の労働運動は、まもなく、ゴンパース流の「純粋にして単純な労働組合主義」の流れの中に組み込まれて行くのである。そしてそのような変化がまた、当然のことながらシアトルの労働団体の日系人への対応に影響を及ぼすことになるのである。

本稿の目的は、このようなゼネラル・ストライキ後のシアトル労働運動の動きを整理することである。本稿は、合衆国の労働運動と日系移民労働者との関わりを吟味するという作業の一部として執筆されたものであるが、同時に、20世紀初頭のアメリカ社会と労働運動において、AFLとそのゴンパース主義が果たした役割を再検討するための手がかりとなるであろう。

1 シアトル労働運動と OBU (One Big Union) 問題

ゼネラル・ストライキの発生は、AFL やその傘下の全国組合、国際組合の本部のシアトル労働運動に対する警戒心を、あらためてかきたてることとなった。AFLの機関誌、『アメリカン・フェデレイションニスト』の論説は次のように述べている。

シアトル中央労働評議会 (the Seattle Central Labor Union) によって開始されたゼネラル・ストライキはアメリカ労働総同盟の規約に違反する企てである。大多数のローカル・ユニオンは国際組合からの承認を得ておらず、その精神的、財政的支持も受けな

かった。反抗の精神によって生まれ、秩序ある手続きと組合員の権利と特権を守るために定められているすべての規約を無視し、すべてのローカル・ユニオンと国際組合の基金を中央労働評議会（central labor unions）の役員の意志と気まぐれに委ねる危険にさらすことによって、このストライキはすぐに失敗することがはじめから運命づけられていたのである⁽⁶⁾。

しかしながらこのような批判も、ただちにシアトル労働運動の転換をもたらすものとはならなかった。その反対に、まもなくシアトルの、あるいはより広くワシントン州の労働運動は、ゼネラル・ストライキと同様に、あるいはむしろそれ以上にゴンパース主義に反する産業別組合主義への転換を図って、再度 AFL 本部と衝突するのである。

AFL 系のローカル組合を産業別に組織しようとする志向はかねてからシアトルに存在していた。ダンカンがそのもっとも有力な推進者であり、したがってそのようなプランはダンカン主義とかダンカン・プランと呼ばれていた⁽⁷⁾。

しかしながら、ゼネラル・ストライキ直後のシアトルで産業別組合主義への転換が大問題となったのは、このようなかねてからの運動の結果ではなく、カナダの One Big Union（以下、OBU と略す）運動の影響であった。そしてこの運動は、ダンカン・プランが AFL の内部からの変革を意図したものであったのに対して、AFL からの分離、独立を辞さないより徹底したものであった。

OBU は、1919年、AFL のカナダ版ともいべきカナダ労働組合会議 The Trades and Labor Congress（以下、TLC と略す）の方針に不満を持ったカナダ西部の活動家たちによって創立された。OBU は急速に勢力を

(6) "More Lessons Than One in Seattle Strike", *American Federationist*, 26 (March, 1919), pp. 243-244.

(7) Friedheim, *op. cit.*, pp. 32-33, 48-49.

拡大し、危機感を持った AFL, TLC, さらには傘下の国際組合の本部が多数のオルグを派遣してこれを抑えようとしたにもかかわらず、ブリティッシュ・コロンビア州労働総同盟、ヴァンクーヴァー労働評議会をはじめとする重要な組織をその支配下においたのである⁽⁸⁾。

当時のシアトルにとって、地理的に近く経済的にも共通する点の多いカナダ西部は、同じ合衆国の東部よりもはるかに身近な地域であった。しかも OBU は、合衆国において以前から産業別組合主義を奉じていた IWW と異なっており、AFL 系組合を脱退した熟練労働者をむしろ主力としていた。ゴンパース主義に不満なシアトルの労働者や AFL 系労働団体が OBU に注目したのは当然であった。

1919年4月、カナダ OBU 運動の二人の指導者が SCLC で演説し、「階級的労働運動がただちにクラフト・ユニオンズムに取って代わらねばならない」と述べて、「嵐のような拍手喝采」を受けた。また5月には、国際沖仲仕組合の太平洋岸大会で「ブリティッシュ・コロンビアの OBU を模範とする産業別組合の結成」を支持する決議が通過し、「シアトルの土地に OBU の種」が植え付けられたのである。まもなく沖仲仕組合は、SCLC に対して「カナダの分離運動について考慮する」ように要請した。SCLC はこの時にはこの要請を受け入れず、逆に、「AFL からの分離を擁護する通信や個人は一切無視する」ことを決定した。しかしながら OBU 支持者は6月にベリンガムで開催される WSFL の大会に向けて活動を開始した⁽⁹⁾。

この大会で彼らは一応の成功を収めた。大会は、WSFL の財務書記として、左翼ではあるが反 OBU であったチャールス・ペリー・テイラーに代えて、OBU 派の L.W.バックを選出した。また、タコマの沖仲仕で国際沖仲仕

(8) David Jay Bercuson, "The One Big Union Movement in Washington", *Pacific Northwest Quarterly*, 69 (July 1978), pp. 127-128.

(9) *Ibid.*, pp. 129-130.

組合の太平洋岸地区書記であるハリー・ライトの提案を可決した。この提案の内容は、ONE BIG UNION の設立をめぐるレファレンダムを行なう、そしてそれが組合員の過半数の支持を得たならば、60日以内にシアトルで WSFL の組織の変更を議論するための大会を開催する、というものであった。しかしながら、OBU 支持派の勝利は完全ではなかった。大会では同時に、ゴンパースの忠実な支持者でワシントン州労働界保守派の中心人物であるウィリアム・ショートが、444票対278票で、OBU 支持の候補者を破って会長に再選されたのである⁽¹⁰⁾。

まもなく WSFL の執行部はレファレンダムの実施要領を定め、投票用紙の印刷、配布に着手した。ユニオン・レコード紙も OBU の支持者と反対者の論争のために紙面を提供した。

ハリー・ライトは、ワシントン州の OBU 運動はカナダの運動とは異なって AFL からの脱退を意味するものではない、IWW とも無関係である、しかし IWW にもし関係があったとしても OBU を拒否する必要はない、それは星条旗が日本で作られたものだからと言ってそれを拒否する必要がないのと同じことである、OBU は労働運動を産業別に再編成することによって未組織労働者の組織化を可能にする、などと主張して OBU 運動への参加を呼びかけた。これに対してショートは、ユニオン・レコード紙と傘下のローカル・ユニオンに送った書簡で、OBU の結成は分離を意味し、そして分離はカナダ同様にワシントンでも挫折と敗北を意味するであろうと反論した。

(10) Ibid., pp. 130-131. また新財務書記のバックも、大会後にショートが AFL 本部に報告したところによると、“very progressive”ではあるが“ultra-radical”ではなく、ショートは「彼を適切な範囲のうちに止めておくことができる we will be able to keep him within proper bounds...」と信じていたという (Jonathan Dembo, “A History of Washington State Labor Movement, 1885-1935”, Ph.D. dissertation, University of Washington, p. 229). 実際にバックは、OBU をめぐる最後の対決の場となった8月20日の SCLC では、ダンカンとともに、AFL との分離の危険を冒してまで OBU を推進することには反対の立場をとった (Bercuson, op. cit., p. 134).

チャールズ・ペリー・テイラーも、我々は OBU を必要とはしていない、OBU は「どこに行くのかを誰も知らない No one knows where」という点ではシアトル・ゼネラル・ストライキと同じであると主張した⁽¹¹⁾。

ショートはこの問題の解決に自信を持っていた。すなわち、外部からの介入や援助がなくともワシントンの労働者の過半は OBU 反対の投票をするであろうと考えていた。

しかしながら、AFL 本部の指導者たちはそれほど楽観的ではなかった。「北西部の運動に現在注入されている毒が他の地域に広がるのを防がなければならない」、また「この地域で荒れ狂っているいぶり火を消し止めなければならない」、さもないと「それはやがてわが国の多数の工業中心地の大火災となって燃え上がるかも知れない」というのが彼らの懸念であった⁽¹²⁾。

かくして AFL 本部は、WSFL を激しく批判し、レファレンダムをただちに中止しないならば、そのチャーターを取り消して本部に忠実な州組織を別に設立すると通告した。多数の国際組合の本部もこの攻撃に加わり、そのローカル・ユニオンに対して投票に参加しないよう命令した。

AFL 本部の処置はワシントン州の労働運動を混乱させた。ショートのような OBU 反対派すらこれに抗議した。彼らは、AFL 本部の一時的な態度がワシントン州の労働者の自尊心を刺激し、かえって彼らを OBU 陣営に追いやってしまうことを恐れたのである。

8月13日のシアトル中央労働評議会は、AFL の行動を批判し、レファレンダムの継続を要求する決議を採択した⁽¹³⁾。

(11) Ibid., pp.131-132. なお, “No one knows where” というのは, ゼネラル・ストライキ直前の『シアトル・ユニオン・レコード』に掲載されたアンナ・ルーズ・ストロングの論説のタイトルであり, ゼネラル・ストライキの危険な傾向の象徴として反対派の攻撃的となった。

(12) 当時, ワシントン州のみならずモンタナ州でも類似の動きが見られたという事実が, AFL 本部の危機感をかき立てた原因ではないかと思われる (Ibid., p.132)。

(13) Ibid., p.133.

しかしながらその翌日、WSFLの執行委員会は、AFL本部の一方的な処置に対して抗議の意を表明し、AFLが介入しなくてもレファレンダムの問題は十分解決可能であった、介入はかえって事態を混乱させたと主張しながらも、AFLの最後通告の受け入れを決定した。AFLの役員として「他に選択の余地がない」という事実を彼らは強調した⁽¹⁴⁾。

事実上最後の戦いは8月20日のシアトル中央労働評議会で行われた。OBUの支持者はWSFLの決定を批判し、中央労働評議会がこれに代わってレファレンダムを遂行すること、WSFLへの上納金支払を停止することを主張した。

鍵を握っていたのはダンカンであった。彼は産業別組合主義者として知られていた。またそれ以外の多くの点でも左翼と同一の立場を取っていた。1919年のAFL大会では、ゴンパースや保守派によってももちろん否決されたはしたが、ロシア革命への共感、アメリカの介入と封鎖への抗議、ソ連への信用供与などを盛り込んだ決議案を提出していた。したがってOBU派は彼の支持を期待していた。

しかしながらダンカンは、シアトル労働運動がAFLから、したがって合衆国の他の地域の労働運動から孤立することには反対であった。そして彼の影響力が流れを決めた。SCLCは95票対57票でWSFLのAFLへの屈服を支持することを決定した⁽¹⁵⁾。ワシントン州のOBU運動は最終的に敗北したのである。

(14) Ibid., pp. 133-134.

(15) Dembo, op. cit., pp. 234, 239-240, Carlos A. Schwantes, "Leftward Tilt on the Pacific Slope: Indigenous unionism and the Struggle against AFL Hegemony in the State of Washington", *Pacific Northwest Quarterly*, 70-1 (January 1979), p. 33.

2 シアトル労働運動と農民労働党

AFL の政界への対応の基本は、無党派主義、すなわち共和、民主の二大政党の候補者をその労働運動に対する姿勢に応じて支持し、あるいは批判するというものであった。したがって独立の労働者政党、ないし社会主義政党の設立は、産業別組合主義とならぶタブーであった。シアトル労働運動はまもなくこのタブーにも挑戦した。

もちろん、ショートに率いられた保守派の活動家は、ワシントン州においてもゴンパース主義に基づいた政治活動を追求していた。1919年の彼らの方針は、ゼネラル・ストライキ後の経営者団体の攻撃をはねかえすために、鉄道労働組合 Railroad Brotherhoods やワシントン州グレンジ Washington State Grange と手を組んでトリプル・アライアンス Washington State Triple Alliance (以下、WSTA と略す) を結成し、このゆるやかな同盟によって二大政党の少なくとも一つの政策や候補者決定に影響を及ぼさうというものであった。

6月のWSFL大会はWSTAの設立を600票対85票で支持した。大差がついたのは、この提案が後日における独立の労働者政党結成の可能性を排除するものではなかったために、保守派のみならず革新派の全員、さらには急進派の一部もWSTAの設立に賛成したためである⁽¹⁶⁾。

しかしながら、WSTAは多くの困難な問題を抱え込んでいた。各組織間の、あるいは個人的な対立、政策の相違がその影響力を弱めていた⁽¹⁷⁾。またシアトル周辺地区のトリプル・アライアンス支部は事実上ダンカンと彼の支持者によって支配されていた。ゴンパース主義に批判的だったダンカンは、

(16) Hamilton Cravens, "A History of the Washington Farmer-Labor Party, 1918-1924", MA Thesis, University of Washington, 1962, p. 87.

(17) Ibid., pp. 97-100.

当然のことながらこの組織を独立の労働者政党の運動のために利用しようと考えていたのである⁽¹⁸⁾。

その機会はまだなく訪れた。1919年11月、ゴンパース流の「純粹にして單純な労働組合主義」に批判的な合衆国各地のローカル・ユニオン、中央労働評議会、州労働総同盟の代表が、シカゴに集まってアメリカ労働党 The American Labor Party を結成したのである。もちろん AFL や全国組合の本部はこれを厳しく批判した。しかしながら SCLC は、1920年4月、この運動に参加することを決定したのである。

1920年7月、アメリカ労働党は、その副委員長に選ばれていたダンカンの司会のもとにシカゴで大会を開き、民主党を分離したリベラル派の実業家、専門職従事者、知識人からなる政治団体、フォーティ・エイト委員会 Committee of Forty-Eight と合同し、新たに農民労働党 The Farmer-Labor Party (以下、FLP と略す) を結成した。この新しい政党は、天然資源や基幹産業、銀行の国有化、男女やあらゆる人種の平等などを含む32の原則を宣言するとともに、ユタ州の法律家で IWW を弁護したこともあるパーリー・パーカー・クリステンセンを大統領候補に選んだ⁽¹⁹⁾。

ワシントン州でも、その直後に、11月の選挙に備えて運動方針を決定すべく、WSTA、無党派連盟 Washington Non-Partisan League、鉄道員政治クラブ Railwaymen's Political Club、ワシントン州フォーティ・エイト委員会など、同州の進歩的政治団体が、ヤキマで大会を開いた。このうちフォーティ・エイト委員会は第三政党運動を支持し、無党派連盟と鉄道員政治クラブはこれに反対であった。かぎを握っていたのは最大勢力の WSTA であった。

(18) Dembo, *op. cit.*, p. 274.

(19) *Ibid.*, pp. 107-111, O, Connell, *op. cit.*, p. 158-161, Selig Perlman and Philip Taft, *History of Labor in the United States, 1895-1932: Vol 4 Labor Movement*, New York, 1966 (original ed. 1935), pp. 527-528.

WSTA の大会で、ショートら保守派の活動家たちは、無党派連盟などと協力して共和党の予備選挙に参加することを主張した。しかしながら彼らの構想は挫折した。革新派と急進派が、社会主義者の支援もとりつけて多数を制することに成功し、149票対57票で、WSTA はFLP 支持を決定したのである。

フォーティ・エイト委員会はこれを歓迎し新党への参加を決定した。他方鉄道員政治クラブと無党派連盟は新党を拒否して共和党の予備選挙に参加することを決定した。もっとも、彼らが共和党予備選挙で知事、副知事の候補に推そうとしていたロバート・ブリッジズとエリヒュー・ボールズがこの推薦を拒否して FLP 支持を表明したこともあって、無党派連盟の態度は後に大きく変化した。まずキング郡をはじめとするいくつかの郡の無党派連盟支部が FLP 支持を表明し、ついには州の執行委員会も、「新党に参加する以外には選択の余地がなくなった」と声明して、その方針を変更した⁽²⁰⁾。

ワシントン州の FLP は9月にシアトルで大会を開いた。それ以前からワシントン州の、あるいは全国の改革運動に携わってきた250人ほどの代表がこの大会に出席した。「いかなる基準によっても、新しい党は、自分たちこそついにその時を得た運動の前衛であるという確信によって団結した、背景と個性において多様な人々の注目すべきコレクションであった」とシュワッツは述べている⁽²¹⁾。

大会は上院議員候補としてシアトル港湾委員会事務局長 C. J. フランスを、下院議員候補として第一区（シアトルとブレマトンを含むキング郡およびキ

(20) Cravens, op. cit., pp. 111-119, do., "The Emergence of the Farmer Labor Party in Washington Politics, 1919-1920", *Pacific Northwest Quarterly*, 57 (October, 1966), pp. 153-154.

(21) Carlos A. Schwantes, "Farmer-Labor Insurgency in Washington State: William Bouck, the Grange, and the Western Progressive Farmers", *Pacific Northwest Quarterly*, 76 (January, 1985), p. 5.

トサップ郡)にダンカン, 第二区(州北西部)にワシントン州グレンジ総裁のウィリアム・バウク, 第三区(州南西部)にタコマの法律家ホームー・T. ボーンを, 知事候補としてシアトル港湾委員会委員長で農場経営者のロバート・ブリッジズを選んだ。また, 全国党の綱領に移動労働者への選挙権付与などいくつかの項目を追加して, 11月に向けての選挙戦を戦うことを決議した⁽²²⁾。

この戦いでは, 特に知事選挙において日系人問題が大きな焦点になった。しかしこれについてはすでに別稿でかなり詳しく言及しているのでここでは繰り返さず, 結果だけを見ておこう⁽²³⁾。

主な選挙の結果は次の表に示されている。その評価は微妙である。

選挙結果要約, ワシントン州, 1920年11月

官職	共和党	民主党	農民労働党	社会党
大統領	233,137	84,298	77,246	8,913
知事	210,662	66,079	121,371	—
上院議員	217,069	68,488	99,309	—
その他の州官職への概算平均投票数	215,000	60,000	100,000	—

出所 Hamilton Cravens, "The Emergence of the Farmer Labor Party in Washington Politics", p. 157.

選挙の目的が当選することであり, その結果として立法その他に関して現実に影響力を持つことであると考えれば, FLP は敗北したと言わざるを得ない。共和党がほとんどすべての選挙戦で勝利した。FLP の候補者は, わずかに州上院選挙で一人, 州下院選挙で二人が当選しただけであった。ショートのような保守派が, やはり第三政党方式は失敗であったと結論し, 他の方法を模索し始めたのは当然であった。

しかしながら1920年というのは, 第一次大戦後の保守化, 反動化の流れに

(22) O'Connell, op. cit., pp. 161-162.

(23) 前掲拙稿「シアトル・ゼネラル・ストライキと日系人労働者(Ⅲ)」344-346頁。

乗って全国的に共和党が圧勝した年であった。そのような中で、結党後一年を経ていない改革派の新政党が、大統領選挙を除けば、とにもかくにも二大政党の一つである民主党を、かなり上回る支持を獲得できたのである⁽²⁴⁾。第三政党運動を追求してきた革新派、急進派の活動家が FLP の今後に期待をかけたのもこれまた当然であった。

しかしながら、まもなくシアトル労働運動の左翼活動家の内部で生じた論争が、FLP のその後の発展にとって大きなブレイキとなった。そしてこの論争の最大の焦点になったのはユニオン・レコード紙であった。

3 「労働資本家 labor-capitalist」論争とユニオン・レコード紙の危機

論争は急進派の活動家たちがシアトルのいわゆる「労働資本家」に対する攻撃を開始したことによって生じた。保守派もまた攻撃の対象になったが、最大の焦点はユニオン・レコード紙とオルトであり、その結果としてユニオン・レコード紙とシアトル労働運動は癒しがたい打撃を受けたのである。

「労働資本家」論争が発生するまでは、ユニオン・レコード紙に対する批判はむしろ保守派からなされていた。ショートはユニオン・レコード紙が WSFL のニュースの扱いに関して彼を差別していると抗議し、他方でオルトは、ショートがユニオン・レコード紙よりも、シアトルの一般新聞の中では相対的に労働運動に好意的と思われていたシアトル・スター紙の方に、ニュースを流していると主張した。興奮した時にオルトは、ショートを「ゴンパースの見解の奴隷」と呼び、「シアトル労働運動の見解はゴンパースとは違う、それゆえショートとは同意できなかったのだ」と主張したことも

(24) FLP が民主党を上回る 2 番目の得票を獲得したのはワシントン州の他ではサウス・ダコタ州だけである (Perlman and Taft, *op. cit.*, p. 528)。

あったという⁽²⁵⁾。しかしながらこの論争の渦中で、このような対立と協調の構図が完全に变化したのである。

SCLC はそれまでにかかなりの数の、労働団体、あるいは運動関係者によって設立された企業を支援してきた。それは生産者と消費者を直結することによって労働者の生計を案にするという目的の場合もあったし、ブラックリストに載せられた活動家の救済が目的の場合もあった。さらには、労働者の零細な貯蓄を反組合的な銀行によって利用されないための金融機関もいくつか設立されていた⁽²⁶⁾。

このように労働団体が企業を設立することを、あるいは活動家がこれに経営者、役員として参加することをどのように評価するかは、かなりむずかしい問題である。きわめて楽観的に考えれば、これは労働者、あるいは生産者自身による産業の管理への平和的移行手段の一つである。オCONNELLは、オルトがこれらの企業に関わった動機はそのようなものであったと主張している。しかしながら同時に、多くの、特に保守派の活動家の場合は、労働運動の大義よりも投資による収入自体が目的のことも少なくなかったであろう。そして意地悪く考えれば、「いつの日か労働者であることをやめて」経営者の側に移る機会をこれらの投資が与えてくれるのではないかという「密かな、しかし抑えがたい」期待も抱かれていたように思われる⁽²⁷⁾。

このことは急進派にとって労働運動の墮落と感じられた。そこで彼らはこのような企業の役員たちを「労働資本家」と呼んだのである。

しかも、これらの企業の経営は必ずしも健全ではなかった。そしてそのこ

(25) O'Connell, op. cit., pp. 95, 177-178.

(26) Ibid., p. 183. なお、FRANKは当時のシアトルのこのような事業は「政治的、経済的目的」に照らして5つのタイプに分類できると述べて、詳細に吟味している。Cf. Dana Lynn Frank, "At the Point of Consumption: Seattle Labor and the Politics of Consumption, 1919-1927", Ph. D. Dissertation, Yale University, 1988, pp. 356-389.

(27) O'Connell, op. cit., p. 183.

とは1920年から22年にかけての戦後不況においてこれらの企業の一部が経営不振に陥った時に明らかになったのである。

ともあれ、1920年6月、これらの企業の一つであるクラス・A・シアターを調査するという動議が、SCLCの会議で提案された。この動議は「組合が所有しているとされているすべての企業」の調査に修正されて、可決された。そしてそのための委員会が設置されたのである。

調査が進むにつれて、事実上この委員会は、オルトとユニオン・レコード紙をその標的にするようになっていった。そして1921年3月2日に、社員の数が多すぎる、まじめに働いていない社員がいる、他の事業に関係している役員が多すぎるなど、ユニオン・レコード紙の運営をきわめて厳しく批判する報告書を、SCLCに提出したのである⁽²⁸⁾。

批判にまったく根拠がないわけではなかった。立場上オルトは多くのSCLC関連企業から役員への就任を要請され、それを引き受けていた。他の労働資本家と異なり、オルトの場合、ごく一部を除いて無報酬の名誉職ではあったが、このような相互の役員兼任関係が関連企業の経営を不明朗なものにしていたのは事実であった⁽²⁹⁾。またユニオン・レコード紙の経営者としてのオルトはかなり放漫であって、多くの赤字を抱えていた⁽³⁰⁾。その赤字は組合や組合員の拠出金やカンパで埋められていたのである。

(28) 以上、Ibid., pp. 183-185.

(29) オルトは、“editor of the Record and a member of its Board of Control”の他に、“Vice President of the Listman Service Company, a director of the United Finance Company, partner in the Padilla Bay Land Company, director of the General Distributors Corporation”そして“persident of the Seattle Union Theatre Company”であった (Frank, op. cit., p. 405)。

(30) ユニオン・レコード紙の経営危機はもちろんオルトだけの責任ではない。ゼネラル・ストライキ後のシアトル労働運動の退潮、経営者団体によるボイコット、くわえて1919年11月のいわゆる「セントラリア虐殺 Centralia massacre」後の当局による弾圧が、ユニオン・レコード紙に大きな打撃となった。しかし、オルトがこのような危機に賢明に対処しうるタイプの経営者ではなかったことも事実である。

オルトにとって不利であったのはユニオン・レコード紙の内部に彼の批判者が少なくなかったことである。職務上のことで個人的にオルトに不満を持っていた者も、政治的に急進派と近かった社員も、ともにユニオン・レコード紙内部の事情を調査委員会に語ったのである⁽³¹⁾。

1921年春に繰り返し開かれたこの問題についての会議はいずれも混乱し、急進派やウォブリーズで埋められたギャラリーからは怒号が乱れ飛んだ。そして分裂はますます深刻になっていった。

急進派は会議でオルトを激しく批判し、しばしば成功した。たとえば3月16日の会議では、ユニオン・レコード紙の人員過剰についての委員会の主張が84票対44票で認められた⁽³²⁾。3月24日の会議では、委員会の最終報告が審議され、企業の役員となったり、その名前を利用することを許している者をSCLCの関連団体の役員ポストから追放するという決議が、賛成100票、反対94票、保留153票で可決された。もっとも、ダンカンの提案によって、SCLCが公式に認めた企業についてはそれから除かれることとなり、その範囲はかなり狭められた⁽³³⁾。

しかしながら、オルトもまた激しく反撃した。彼はユニオン・レコード紙を利用して委員会に反論するとともに、委員会メンバーを含む急進派を次々に解雇した。彼は急進派を、モスクワからの指令を受けてアメリカ労働運動を支配しようと図る共産主義者である、と攻撃した。同時に、もしもユニオン・レコード紙がSCLCの支持を失ったならば、個人の新聞としてでもこれを発行すると宣言した⁽³⁴⁾。

急進派はダンカンの支持を期待して圧力をかけた。しかしダンカンはこれを拒否してオルトの支援に全力を挙げた。急進派の勢力増大に危機感を覚え

(31) O'Connell, *op. cit.*, pp. 180-182.

(32) *Ibid.*, p. 187.

(33) Dembo, *op. cit.*, p. 312, Frank, *op. cit.*, p. 417.

(34) O'Connell, *op. cit.*, pp. 187-189.

たショートも、事件発生以前のオルトとユニオン・レコード紙の主張に対する不満をひとまずおいて、これに全面的に協力した。皮肉なことに、前年のWSFL会長の選挙において、ショートの対立候補としてオルトが支持したフランク・クリフォードが、今では調査委員の一人としてオルトを追求していたのである⁽³⁵⁾。

論争とその背後で行われた多数派工作は、なかば泥仕合の様相を呈した。保守派は、それまであまりSCLCの会議に熱心ではなく、したがって代議員を送っていないかった保守的なローカルに、全代議員を出席させるように働きかけた。また急進派を支持する代議員の出身ローカルに圧力をかけ、その代議員をリコールするように説得した。急進派ももちろん同様の手段を用いたのである⁽³⁶⁾。

30日の会議で急進派は、オルト、および彼を支持して活動したSCLC議長のジャック・マンディなどの辞職と、「労働資本家」フランク・ラスト、ジョージ・リストマンなどのユニオン・レコード役員会からの排除を要求する決議案を提出した。

ある程度は譲歩する必要があると感じたオルトは、関係している企業からただちに辞職することは拒否しながらも、「これらの事業が価値がないからではなく誤解を避けるために」という理由で、自分の名前を印刷物などに使用することを、今後は拒否するという書簡を発表した。オルトと同じように「労働資本家」として攻撃されていたフランク・ラストも同様の措置を取った。そして結局のところ会議は、賛成102票、反対123票、棄権127票で急進派の提案を否決した⁽³⁷⁾。

(35) Ibid., pp. 178, 189.

(36) ダンカンをめぐるゴタゴタはその典型である。急進派はダンカンの選出母体であるマシニスト・ローカル79に働きかけ、彼をリコールすることに成功した。ところがダンカンは、ただちに保守派のオートメカニック・ローカル289から信任状を得て、会議に復帰したのである。Cf. Frank, op. cit., p. 423.

(37) Dembo, op. cit., pp. 313-314.

4月6日、急進派は3月30日の提案とほぼ同一の提案を SCLC の会議に提出し、今度は賛成63票、反対106票で敗れた⁽³⁸⁾。

こうして情勢は逆転し始めた。急進派は分裂し、一部はオルトとの妥協の道を探り始めた。しかしながらオルトはもはやそれに応じようとはしなかったのである。

しかも、勝利を取めた保守派と革新派はあいついでこれを固める措置を取った。まず3月24日に可決された急進派の決議についての有効性を尋ねる書簡が、ゴンパースに送られた。ゴンパースは5月に、この決議は AFL 規約への違反であり、無効であると回答した。9月には、“Our House” というカフェテリアをめぐる AFL 系労働者と IWW 系労働者の対立の結果として、SCLC のすべての代議員に、AFL と対立している組織に加盟してはいないという宣誓を要求する決議が可決された。また、SCLC の会議を秘密会として、傍聴者数を出席代議員数以下に制限し、各傍聴者について3分の2以上の賛成を得た場合のみ傍聴が認められるという決議や、会議は夜の11時をもって解散する、という決議が採択されたのである⁽³⁹⁾。

かくしてシアトル労働運動における急進派の影響力はこの事件を契機に衰退した。そればかりでなく、方法においては保守派に近く、しかし原則においてはむしろ急進派に近かった革新派の指導者の少なくとも一部が、これを契機に保守派に接近することになったのである。4月2日、オルトはユニオン・レコード紙の第1面の論説で、「我々はこの新聞を IWW や共産党の支配下におこうとするあらゆる試みと最後まで戦う」と宣言した⁽⁴⁰⁾。

(38) Cravens, “A History of Washington Famer Labor Party”, p. 149.

(39) Ibid., pp. 152-153, Dembo, op. cit., pp. 315, 321-324..

(40) Dembo, op. cit., p. 315, O’Connell, op. cit., p. 195.

4 シアトル労働運動の転換

「労働資本家」論争はダンカンを中心とする SCLC の威信を大きく低下させ、シアトルおよびワシントン州におけるゴンパース主義の勝利をもたらすことになった。ここでは、そのようなシアトル労働運動のダンカン主義からゴンパース主義への転換の過程を、3つの事件、すなわち FLP 運動の挫折、ダンカンの失脚、そしてユニオン・レコード紙の衰退に焦点をあてて見ておこう。

(1) ダンカンと SCLC の影響力の低下は、まず1922年の選挙の際の、無党派主義か第三政党主義（すなわち FLP）かをめぐる、ダンカンとショートとの抗争の際に明らかとなった。

ワシントン州の労働運動関係者の1922年選挙における最大の課題は、共和党上院議員マイルズ・ポインデクスターを落選させることであった。1910年、1916年の選挙において改革派として当選したポインデクスターは、その任期中に共和党指導部や東部の実業界との関係を深め、徐々にワシントン州の農民や労働者の要求に無関心になっていった。1920年に、もちろん失敗に終わったけれども、共和党の大統領候補になりたいという野心を抱いたこともあって、彼のこのような姿勢は一層露骨になり、1922年までには共和党反動派のシンボル、改革派の完全な敵と目されるようになっていたのである⁽⁴¹⁾。

労働運動内部の対立はどのような手段で彼を倒すかをめぐって生じた。ショートを中心とする保守派は、共和党の予備選挙に対抗馬を立てて彼を倒

(41) Cole Robert Leslie, "The Democratic Party in Washington State, 1919-1933: Barometer of Social Change", Ph. D. Dissertation, University of Washington, 1972, p. 57.

すことを狙っていた。他方ダンカンを中心とする革新派や急進派の活動家は、1920年同様に独立の第三政党、すなわち FLP の候補を立てて本選挙で彼を打ち破ることを望んでいた。

1922年2月、SCLC は今回も第三政党方式を選ぶことを決議して、このような抗争の火蓋を切った⁽⁴²⁾。このような動きによって第三政党方式が既成事実となるのを警戒したショートは、WSFL 加盟の全ローカルにたいして、7月の WSFL 大会までは、政治活動についての決定を差し控えるようにという回状を送った。これに対してダンカン派は、FLP は WSFL の大会が別に決議するまでは WSFL によって公認された政治団体であって、それに対する支持を表明するのに7月まで待つ必要はないという回状を、やはり加盟全ローカルに送付した。これを知ったショートは再度回状を送り、SCLC は WSFL の権限を横領しようとしていると非難した⁽⁴³⁾。

かくして、結局のところ1922年の7月に開かれた WSFL の大会が両者の対決の場となった。

開会にあたってショートは、ポインデクスター議員は「もっとも実際的なやり方で打ち破られなければならない」と強調した。他方、FLP 書記のジョン・C・ケネディが FLP に対する WSFL の支持を要請した。

本格的論戦は、SCLC 代表の一人で民主党員のフランク・コテリルが、AFL の伝統である無党派主義の政治路線の支持を呼びかける決議を提出したことによって始まった。同じく SCLC の代表であったダンカンをはじめ、FLP 支持の代議員がこれに反対し、激しい議論が続いた。結論は翌日に持ち越された。しかし結局のところ110票対48票でコテリルの提案は可決されたのである⁽⁴⁴⁾。

(42) Cravens, "A History of Washington Famer Labor Party", pp. 157-159, O'Connell, op. cit., p. 215.

(43) Cravens, "A History of Washington Famer Labor Party", pp. 162-164, Schwantes, "Farmer-Labor Insurgency", pp. 8-9, Dembo, op. cit., p. 347.

こうしてワシントン州の労働界は、FLP と絶縁し、無党派主義の路線に復帰した。1920年とは異なってショートに代表される保守派の完全な勝利であった⁽⁴⁵⁾。

(2) まもなく、より厳しい試練が、シアトル労働運動に襲いかかった。AFL 本部による SCLC への宣戦布告であり、その結果ダンカンは SCLC 書記の辞任を余儀なくされたのである。

これまでに見てきたようなシアトル労働運動の展開は、もちろん AFL 本部の意に反するものであり、しばしばその許容限度を超えるものであった。かくして1922年春、AFL 本部は、かつてのシアトル労働運動の活動家で当時 AFL のオルグをしていた C.O. ヤングをシアトルに派遣し、SCLC の活動に関する調査を命令した。彼の報告は10月に AFL の執行委員会に提出された。

1923年4月10日、AFL 本部はついに行動を起こした。SCLC に書簡を送り、SCLC は正当な組合活動よりもソヴィエト・ロシアの承認やインドの独立のような労働運動と関係のない問題を優先している、AFL の無党派主義

(44) SCLC の代表ですら49票対25票で決議を支持した。もっとも、後日 SCLC は FLP に反対した代表たちを厳しく批判した (Cravens, "A History of Washington Farmer Labor Party", pp. 165-167, Dembp, op. cit., pp. 350-352)。

(45) もっとも、すべてがショートの思いうように進んだわけではない。共和党予備選挙でポインデクスターを破るには、改革派の候補を一人に絞る必要があった。しかるに、改革派からは3人の候補者が立候補し、関係者の懸命の説得にもかかわらず、だれも辞退しなかった。結果は予想どおり3人の共倒れ、ポインデクスターの当選となったのである。しかしながら、共和党のポインデクスター、民主党のクラレンス・C・ディル、そして FLP のダンカンの争いとなった本選挙において、労働団体や農民団体の多くは民主党のディルを支援した (ただしショートは公式には中立を保った)。そして選挙の結果はディルの当選であった。彼は13万375票を獲得し、12万6556票のポインデクスターを破った。それに対してダンカンはわずかに3万5352票を獲得したに過ぎなかった。Cravens, "A History of Washington Farmer Labor Party", pp. 171-184, Leslie, op. cit., pp. 68-80.

の政策に挑戦している、さらには IWW のような二重組合を容認しているなどと激しく批判し、もし SCLC が 2 カ月以内に方針を変更しないならばチャーターを取り消すと通告した。今や AFL 本部がシアトル労働運動の肅清を決意していることは明らかであった⁽⁴⁶⁾。

本部の批判に答えるため SCLC は、保守派、革新派、および一部の急進派からなる委員会を任命した。この委員会は、AFL に対する忠誠を誓いつつも、IWW のような二重組織を SCLC が支持したことはなかった、AFL 本部の無党派主義は成功していないのだから独立の第三政党運動は正当である、そもそも民主的な運動の内部には意見の食い違いの余地があるのが当然である、などと反論した。そのような食い違いの例として委員会は、AFL 本部が軽いワインやビールを認めるような禁酒法の修正を支持しているのに対して、SCLC はなおも熱心に禁酒、すなわち「ドライ」を追求しているということを挙げている。AFL の政策に完全に従うならば、ダンカンのような禁酒主義者も本人の意志に反して「ウェット」にならざるを得ないであろう。

もちろんこのような返答は AFL 本部を満足させるものではなかった。本部はあらためて SCLC を攻撃し、SCLC もまた反論を繰り返した⁽⁴⁷⁾。

まもなくブレマトンで開かれた WSFL の大会で、シアトルの一部の組合は、この AFL 本部との論争において SCLC を支持するよう訴えた。しかしながら、論議の末、WSFL はこの件にはタッチしないという決議が採択されたのである⁽⁴⁸⁾。

かくして SCLC とダンカンは追い詰められた。7月12日、1916年以来シア

(46) Cravens, "A History of Washington Famer Labor Party", pp.194-195, Dembo, op. cit., pp. 370-371, O'Connell, op. cit., pp. 222-223.

(47) Cravens, "A History of Washington Famer Labor Party", p. 195, Dembo, op. cit., pp. 371-373.

(48) Cravens, "A History of Washington Famer Labor Party", pp.195-196, Dembo, op. cit., p. 374.

トル労働運動の事実上の指導者であったダンカンは、翌8月に予定されていた SCLC 書記の選挙に出馬しない、と発表した。

クラヴァンスは、ダンカンの辞任表明以降、AFL 本部はシアトル労働運動にたいしてより妥協的な態度を示すようになったと主張している。

それにもかかわらず、その後の経過を見ると、AFL の本部にとってダンカンの辞任は、シアトル労働運動の過去の過ちを免罪するための必要条件ではあっても、決して十分条件ではなかったように思われる。10月にオレゴン州ポートランドで開かれた全国大会において AFL 執行委員会は、SCLC は4月10日の書簡で述べられた事項に関して有罪であると宣言し、1カ月の猶予で、SCLC はその活動範囲をシアトル地区内に限ること、WSFL の管轄を侵さないこと、全国組合、国際組合の権限を尊重すること、そして AFL のすべての政策、規約、原則に従うことを要求した。

数日後 SCLC は、一部の反対を押し切って、この最後通告とでも言うべき条件を受け入れることを決議した⁽⁴⁹⁾。そしてこれは単なるリップ・サービスとはならなかった。フィリップ・タフトの表現を借りるならば、「アメリカ労働総同盟は1924年以後、2度とそこに、アメリカ労働総同盟の政策に対する反対運動のセンターを見いだすことはなかった」⁽⁵⁰⁾のである。

(3) ユニオン・レコード紙は、「労働資本家」論争とダンカンの失脚後も、なお若干の期間を生き延びた。しかし決して順調な歩みをたどったわけではなかった。一般組合員の間には植え付けられたオルトに対する不信は簡単には消えなかった。また、すでに危機に陥っていたユニオン・レコード紙の経営は、急進派ローカルとその組合員の支持と援助を失うことによって、いよ

(49) Cravens, "A History of Washington Farmer Labor Party", pp.197-198, Dembo, op. cit., pp. 375-376. もっとも、それと同時に、「服従は同意を意味するものではない」とも決議した。

(50) Philip Taft, *The A. F. of L. in the Time of Gompers*, New York, 1957, p. 457.

いよ厳しい状況に直面した。かといって保守派の全面的支援も期待できなかった。保守派の指導者の多くにとっては、論争後のオルトとユニオン・レコード紙ですら「なお幾分進歩的 still somewhat progressive」すぎたからである⁽⁵¹⁾。

そして経営上の危機は紙面に反映した。もはやユニオン・レコード紙はスポンサーを怒らせるような記事を掲載できなくなった。オルト自身、ある友人への書簡で、「労働資本家」論争以後のユニオン・レコード紙は、「いずれかのグループを攻撃することになるのではないかという恐れからあえて口を開けることができなくなった」と述べている。ジョージ・ヴァンダーヴィアは、かつて格調高かったユニオン・レコード紙が、今や「安っぽいスキャンダルとセンセーションを売り物にする新聞」に成り下がってしまったと嘆き、マーガレット・トムソンは、「近年のユニオン・レコード紙は、徐々に、階級戦の機関紙から穏健な労働紙へ、そして労働記事を含むリベラル新聞へと変わっていった」と嘆いた。

その間、1920年の最盛時に12万を誇った部数は、1922年末には3万9000部に減少し、その翌年にはさらに8000部を失った。懸命の募金活動、さらには経営形態の変更も徒労に終わった。かつてシアトル労働運動の輝ける星だったユニオン・レコード紙は、1928年2月18日号を最後についに廃刊に追い込まれたのである⁽⁵²⁾。

おわりに

我々にとって次に問題となるのは、このようなダンカンをはじめとする革新派のシアトル労働運動からの失脚が、彼らとの友好関係を保つべく努力し

(51) Frank, *op. cit.*, p. 431.

(52) *Ibid.*, pp. 431-433, O'Connell, *op. cit.*, pp. 235-236.

てきた日系人労働者にたいしてどのような影響を及ぼしたかということである。この問題の考察は、しかしながら別の機会に譲らねばならない。ここでは、最初に紹介した『大北日報』主筆竹内幸次郎の著書の中の、以下のような言葉を引用して、本稿の結びとしておこう。「因に前華州労働組合会頭ダンカン氏の失脚以後、組合内には東洋人排斥の空気が漲るようになった」⁽⁵³⁾。

(53) 竹内幸次郎『前掲書』159頁。もちろん正確には「華州労働組合会頭」は保守派のウィリアム・ショート役職であり、ダンカンが辞した役職は SCLC の書記である。